

2018年8月26日

## 福音書からのメッセージ

シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。（ヨハネによる福音書6章68節）

ヨハネによる福音書6章を、少し振り返ってみたいと思います。まず5000人という群衆を、5つのパンと2匹の魚だけで満腹させる奇跡物語がありました。その出来事を見た群衆は、イエス様を王に担ぎ上げようとします。イエス様はそれを望まず、湖の向こう岸へ逃れます。そのときに、湖の上を歩くイエス様の物語がありました。

そして群衆は、湖の向こう岸までイエス様たちを追いかけます。しかし彼らは、イエス様の言う「まことのパン」の話が理解できませんでした。さらに「わたしは天から降ってきたパンである」という言葉に眉をひそめたのは、ユダヤ人でした。

そして今日の箇所に入ります。ここで不満を口にしたのは弟子たちでした。ここでいわれている弟子とは、いわゆる12弟子以外の弟子のようです。しかしイエス様に弟子として従っていた人たちが、イエス様の元を去ったということです。

群衆が勘違いし、ユダヤ人がつぶやいた。ここまでは、わたしたちはどこか他人事のようにこれらの物語を捉えてしまうかもしれません。わたしたちはイエス様を信じ、イエス様のこともよくわかっている。でも群衆やユダヤ人は仕方がないだろう。そう言って、高みの見物をしていないでしょうか。

今日の箇所は、そんなわたしたちに向けて語られているのかもしれませんが。自分は大丈夫、関係ないと思っているわたしたちに、弟子たちですら、イエス様の元を離れて行ったこの出来事は、何を意味するのでしょうか。



弟子たちは、イエス様と寝食を共にし、イエス様の言葉をいつも聞き、イエス様がおこなう驚くべき業を一番近くで見、イエス様の喜びも、悲しみも、苦しみも、痛みも、間近で感じてきた、

そんな一人一人でした。すべてを捨てて、イエス様と共に歩いて行った、そのような人たちです。しかし、「こんな話を聞いていられようか」と言いながら去っていったのです。

わたしたちは知っています。わたしたちの周りにも弟子たちのように、一度はイエス様に従うという決断をしながら、様々な理由で離れ去ってしまった人たちがたくさんいることを。また自分自身にも経験があるかもしれません。どうしても礼拝に、神さまに心が向かない。陪餐を受けるときに、手がずっと前に出ない。これはわたしたちの誰にでも起こりうる物語なのです。そのときに、「あなたがたも離れて行きたいのか」と言われるイエス様。一体どのような表情をされているのでしょうか。

しかしイエス様は、それでもわたしたちを生かすために、この世に来られました。たとえ離れて行くことがあったとしても、必ず帰ってきてほしい。それがイエス様の願いであり、神さまのみ心です。そしていつも、手を差し伸べてくださるのです。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>